

～ 日本看護系学会協議会連携事業 ～  
公益社団法人日本看護科学学会 平成25年度 災害看護支援事業

## 事業完了報告書

復興の力、コミュニティ再建のため  
の中長期支援  
～はまってけらいん（集まって）  
かだってけらいん（語って）  
を合い言葉に～

所属機関： 日本赤十字北海道看護大学

代表者名： 尾山とし子

## ■ 事業内容

事業の内容、手法、場所、対象者とその人数などを具体的に記載すること。

### I. 第1回目の活動（平成25年8月）

#### 1. 場所・参加者

- 1) 陸前高田市役所 民生部健康推進課：健康推進課長、保健師の2名、教員2名
- 2) 陸前高田市小友町財当仮設住宅談話室：自治会長を含む7名、学生4名、教員3名

#### 2. 活動目的

- 1) 市役所にて、活動実施のための情報収集、打ち合わせ
- 2) 仮設住宅談話室での「お茶っこ」開催
- 3) がん患者さまのためのタオル地帽子の作成と新生児用の帽子の作成に関してのご相談と実施に向けての打ち合わせ

#### 3. 活動内容

・市役所を訪問し、健康推進課の課長と保健師に面会。仮設住宅集会所で実施する救急法とAED講習会の打ち合わせを行った。これまで、3カ所の仮設住宅集会所で実施してきたが、AEDの普及に伴い実施場所を増やしたいという要望を伝え、検討していただくことにした。さらに、社会福祉協議会の方に、仮設の中で裁縫のできる所を新たに探し、帽子作り等も実現できる可能性の有無について情報収集を依頼した。

・財当仮設の自治会長と連絡を取り、仮設の談話室を訪問して「お茶っこ」を開催した。その中で、先に作成していただいたがん患者さまのためのタオル地帽子50個の配布先やその反響についてご報告した。さらに、配布先である釧路赤十字病院から、がん患者さまのタオル帽子に加えて、新生児誕生時の低体温を防ぐための帽子の作成について、依頼のあった事を伝えた。

### II. 第2回目の活動（平成26年1月）

#### 1. 場所・参加者

- 1) 陸前高田市役所 民生部健康推進課：健康推進課長、保健師の2名、教員3名
- 2) 陸前高田市小友町財当仮設住宅談話室：自治会長を含む7名、学生8名、教員3名

#### 2. 活動目的

- 1) 市役所にて、活動実施のための情報収集、打ち合わせ
- 2) 仮設住宅談話室での救急法とAED講習の実施と「お茶っこ」開催
- 3) がん患者さまのためのタオル地帽子の作成と新生児用の帽子の作成に関してのご相談

#### 3. 活動内容

・市役所を訪問し、陸前高田市の被災の皆様の健康状態などを含めた復興の現状について説明を受けた。夏の訪問時にお願いした裁縫ができる仮設の情報については、新たな発掘はなかった。また、3月の救急法・AED講習の普及活動に向け、仮設住宅の拡大の情報収集と話し合いを実施。

・財当仮設住宅談話室での救急法とAEDの講習会および「お茶っこ」の開催。

要望があった新生児誕生時の低体温を防ぐための帽子作成について、前向きなお返事を自治会長さんからいただいていたことから、帽子作りに必要な材料であるタオル収集を釧路赤十字病院に依頼して実施し、今回、持参することができた。

### Ⅲ. 第3回目の活動（平成26年3月）

#### 1. 場所・参加者

- 1) 陸前高田市役所 民生部健康推進課：健康推進課長、保健師の2名、教員3名
- 2) 陸前高田市竹駒町滝の里仮設住宅：14名、教員3名、日赤岩手県支部職員2名
- 3) 陸前高田市高田町柵ヶ沢地区仮設住宅：11名、教員3名、日赤岩手県支部職員2名
- 4) 陸前高田市広田町長洞仮設住宅：4名、教員3名、日赤岩手県支部職員2名
- 5) 陸前高田市小友町財当仮設住宅談話室：自治会長を含む8名、教員3名

#### 2. 活動目的

- 1) 市役所にて、活動実施のための情報収集、打ち合わせ
- 2) 仮設住宅集会所・談話室での救急法・AED講習、家庭でできる応急手当、幼児安全法講習の実施および「お茶っこ」開催

#### 3. 活動内容

・市役所を訪問し、陸前高田市の復興の現状について説明を受けた。高齢化により、在宅医療のシステム化や転居によるストレスの発生など、新たな問題が表面化してきている。

・今回の活動では、新たな仮設住宅での救急法と幼児安全法、AED講習会および「お茶っこ」を開催することができた。これは、市の保健師からの情報で、サロンが行き届いていない仮設や子どもの多い仮設などで幼児安全法の要望があったためである。日赤岩手県支部の協力を得て、講習に使用する資器材の調達にも問題はなかった。また、この活動を赤十字救急法短期講習として位置づけ、参加者には、受講証を交付することとした。

活動についての広報は、事前に各仮設の自治会長さんと連絡を取り、広報用のチラシを郵送して回覧に利用していただき、住民の方に周知するという方法をとった。

以下に、講習内容を記す。

- 1) 挨拶と自己紹介
- 2) オリエンテーション（内容説明）
- 3) 心肺蘇生法（幼児安全法） デモンストレーション 演習（参加者の皆様と共に）
- 4) AEDの使い方 デモンストレーション 演習（参加者の皆様と共に）
- 5) 三角巾や買い物袋を使った腕の吊り方など  
「お茶っこ」 血圧測定、健康相談

## ■ 事業成果

できるだけ具体的に記載すること。

### 1. 陸前高田市の復興の現状に関する情報およびニーズの収集

活動の度に陸前高田市役所を訪問し、健康推進課長や保健師から復興の現状を聞くと共に、仮設住宅からのニーズなどを収集し、活動計画に盛り込んだり、新たな仮設住宅での活動へと進展していくことができた。また、毎回の訪問により、関係性の深まりを感じた。外からのボランティアが減少していることから、陸前高田市の現状を外に発信して欲しいとの声も聞かれ、被災から3年の経過は世の中から忘れ去られてしまうという危機感を払拭できないという感があつた。

「活動を通して被災の方々となつたり、【また、来る。】と約束をしてくれることが、復興への活力につながっているのです。」というお言葉も頂いた。

### 2. 手作り帽子と道内赤十字病院とのつながり

先に、財当仮設住宅の方々には作成していただいたがん患者様のためのタオル地帽子50個の配布先やその反響について、今回の活動でご報告させていただいた。

北見赤十字病院、旭川赤十字病院、釧路赤十字病院が配布先であり、各病院からの感謝の気持ちをお伝えした。特に、釧路赤十字病院からは実際に患者さまが帽子を被られているところを写真で提供してくださっていたので、それを直接渡した。また、添えられていた文章も渡すことによって、がんの患者様の病と闘うための力になったことをお伝えでき、作成していただいた被災者の方々の励みとなり、一方的な支援のあり方ではなく、双方のやりとりが大切であると実感した場面であった。

さらに、釧路赤十字病院からは、新生児誕生時の低体温を防ぐための帽子を作成できないかとのリクエストもあり、今までの経験から考えてみるという前向きな返答を得た。作成するに当たっては、フェイスタオル等の材料の調達が必要となる。そのため、本活動の趣旨でもある、本学が仮設住宅被災者の方と、病院、ひいては北見市をはじめとした市民の皆さんとのつながりを仲介すべく、材料調達を本学で担当し連絡することとなった。そして、釧路赤十字病院に作成用のタオルを収集していただき、直接仮設にお届けすることができた。

「お茶っこ」をしながら、がん患者様の帽子を作成した時のエピソードも聞かれ、皆さんの表情も明るかった。しかし、被災から3年が経過し、逆に焦りやイライラが出てきたという発言もあり、被災者の方々の生活上の格差を感じる場面であった。同時に、「自分たちで立ち上がろうと思っている。しかし、まだ自分たちから積極的になれない部分がある。もうしばらくお願いします。」「赤ちゃんの帽子づくりも、少し時間をください。」というような発言も聞かれた。今後もゆるやかなつながりを保ちながら、元気を取り戻す活動へと工夫しながら持続的に取り組みたい。

同行した学生達の中には、被災地訪問が初めての者も居り、看護を目指す彼らにとって、被災者の現在の生活状況や思いを直に聞き、感じ考えることに大きな意味があつたと考えている。

### 3. 赤十字救急法・AEDの普及活動、「お茶っこ」による場づくり

仮設住宅の集会所や談話室にはAEDが設置されているところがある。設置時には一定の講習を受けていたが、一度講習を受けても忘れてしまうことが多い。また、被災の方の高齢化率も高まっていることから、その必要性は高いと考えられる。そこで、平成24年から本学が続けていた救急法を開催し、講習自体をコミュニティ再生の場づくりの一助とした。

今回は、過去に実施したことのある仮設住宅ではなく、保健師のコーディネートによる新たな仮設住宅での実施であった。また、幼児安全法の要望が初めて出され、地元である日赤岩手県支部の協力の下で開催できたことは有意義であった。日頃「お茶っこ」だけだと、男性の参加者が少ないが、救急法では少人数ではあるが、男性の参加もあり効果的な手法だと

考える。

震災から3年が経過し、仮設住宅それぞれに格差が生じてきている。自治会長を中心に前向きに進んでいる仮設もあれば、サロンや行事が少なく、集まる機会を求めている仮設もあった。「今回のような講習をまたやって欲しい。」「とても勉強になった」「繰り返し学ぶことが大切。」などという声があった。

幼児安全法においても、子どもさんを連れて参加していただき、子どもの「けが」に対する応急処置や異物の除去など日常的によくある内容を盛り込んだことで、実用的に学ぶことができていた。

実施後の「お茶っこ」でも現在の心境も含めて、震災当時のことを語りながら涙する場面も見られた。血圧の高い方には、生活状況なども聞きながら受診を勧めたりと、異常の早期発見にも多少なりとも貢献できたと考えている。

#### 【今後の課題】

被災地は3年が経ち、復興住宅などの建設が進む中、一方で自力再建する方々の転居ストレスや仮設に残された方々のストレス、防災集団移転などによるストレスなど、様々な形でのストレスが起こっている。被災者ひとりひとりを大切にしたい復興を成し遂げるための長期的な支援には、どのようなことが必要なのかを具体的に考えていく必要がある。このことは、陸前高田市の健康推進課長や保健師から投げかけられた課題である。

最後に、被災地の方々からの「忘れないで欲しいという願いと、この状況を広く世の中に発信していただきたい。」との言葉通り、3年の節目からの新たなスタートを、微力ながら手助けしていけたらと願うものである。